

お礼のことば「ありがたい」について

荻野, 千砂子
純真女子短期大学専任講師, 九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8926>

出版情報 : 語文研究. 98, pp.1-14, 2004-12-08. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

おきんね 山梨県 おっきん 宮崎県東臼杵郡、うふくい 鹿児島県喜界島
これは系：これは 福岡県・鹿児島県鹿児島郡、これはこれは 熊本県天草郡・
宮崎県東諸県郡、こりゃこりゃ 岐阜県郡上郡

ちかごろ：長崎県・長崎市

なんとも系：なんとも 秋田県河辺郡・山形県東田川郡・福井県大野郡

(なお、青森県水戸郡に「ごらった」という語形があるが、原義が不明である。)

(注11) 藤原与一(1992)『あいさつことばの世界』(続昭和(平成)日本語方言の総合的研究)第三巻 武蔵野書院

(注12) 平山輝男編(1992)『現代日本語方言大辞典』明治書院

(参考)

・『日本国語大辞典(第二版)』(2001)小学館

(資料)

・『上井覚兼日記』上中「大日本古記録」(1954-55)東京大学史料編纂所 岩波書店

・『断本大系』第三巻・第四巻・第五巻・第六巻・巻七巻・巻八巻 武藤禎夫・岡雅彦編
東京堂出版 1976-77

・『近世文学総索引 近松門左衛門』近世文学総索引編纂委員会編 教育社 1986

・『近松浄瑠璃集上』『日本古典文学大系』49重友毅校注 岩波書店 1958

・『洒落本 滑稽本 人情本』『日本古典文学全集』47 中野三敏・神保五彌・前田愛校注
小学館 1971

* 本稿は平成16年度文部科学省科学研究費補助金若手研究(B)(課題番号:15720107)の研究成果の一部である。

(おぎの ちさこ・純真女子短期大学専任講師 本学大学院博士後期課程)

浩編 勉誠社、『狂言記外五十番の研究』(1997) 北原保雄 大倉浩編 勉誠社、
『続狂言記の研究』(1985) 北原保雄 小林賢次編 勉誠社、『狂言記拾遺の研究』
(1987) 北原保雄 吉見孝夫編 勉誠社

(注6) 『所収書目解題』によると「狂歌咄」の諸本には「狂歌咄」巻一の三 - 八の六丁
を曾呂里新左衛門の咄三丁と入れ替え書名を「曾呂里狂歌咄」としたものがあり、
「寛文十二壬子年仲夏吉辰 京寺町通松原下ル町 菊屋喜兵衛版」の刊記を有す
るといふ。

(注7) 『井原西鶴集』(1996)「新編日本古典文学全集」66 67 宗政五十緒 松田修
暉峻康隆校注・訳 小学館 「好色一代男」「好色五人女」「好色一代女」「西鶴
諸国ばなし」「本朝二十不孝」「男色大鑑」を調査した。

(注8) 『日本方言大辞典』によると「ありがたやかたちけなや」は「神仏を拝して唱え
る語。また、人に感謝して言う語。」とあり、島根県隠岐郡や隠岐島で用いられ
ているという。神仏に対する畏敬と感謝が、次第に人に対して用いられ始めた一
つの過程として重複使用があったものと考えられる。

(注9) 『浪花方言』(1931) 日本古典全集第四期 昭和6年

(注10) 『日本方言大辞典』(1989) 尚学図書編集 小学館

『日本方言大辞典』に記載されている「感謝の気持ちを表す言葉」から語形と使
用地点を抜き出し、直接認定型・自己謙讓型・一部独立型に分類して以下に示す。
(直接認定型)

ありがたい系：あつたい 小児語 秋田県鹿角郡、あんとー 長野県長野市・上
水内郡・徳島県(幼児語)

でかした系：でかした、でけーた 新潟県佐渡 でかしました 新潟県佐渡、れ
かしました 新潟県佐渡、でかした 福井県

うれしい系：うれしや 山梨県南巨摩郡・岐阜県郡上郡

寛大系：おかんだい 山形県庄内(女性語)

(自己謙讓型)

かたじけない系：おかたい 長野県松本市、おかたしけ 長野県上田・上伊那郡、
おかたしけない 長野県上田、おかたじけない 新潟県佐渡・広島県三原市、
おかたじけ 高知県長岡郡、かたいげなござったぞ 長崎県福江市、かたじ
けであす 山形県東村山郡

かぶん系：かぶん 山形県・滋賀県浅井郡、かんばん 秋田県平鹿郡・河辺郡・
山形県東田川郡、かんばん 秋田県仙北郡、おかんばんえ 秋田市、かんばん 秋
田県南秋田郡、かんばん 秋田県山本郡

かんにん系：かんにん 京都市、かん 三重県志摩郡

(一部独立型)

おおきに系：おーきに 北海道松前郡・岩手県宮古市・気仙郡・山形県・茨城県・
栃木県河内郡・千葉県夷隅郡・新潟県佐渡・東蒲原郡・石川県鳳至郡・福井
県・山梨県・岐阜県・静岡県志太郡・島田市・愛知県・三重県・滋賀県・京
都府・大阪府泉北郡・兵庫県・奈良県・和歌山県・鳥取県・島根県隠岐島・
広島県安芸郡・山口県豊浦郡・大島・徳島県・香川県・小豆島・高知県・福
岡県粕屋郡・長崎県・大分県大分郡・南海部郡・宮崎県・鹿児島県、おーけ
な 徳島県美馬郡、おーきん 福井県・山梨県・三重県・滋賀県野洲郡・大
阪府泉北郡・佐賀県東松浦郡・宮崎県日南市、おーきんと 奈良県南大和、

一部独立型：おおきに系・だんだん系・これは系・ちかごろ・なんとも系
一部独立型の根底にあるのは直接認定型と自己謙讓型で、一部独立型はその両者を表面的に中和するお礼の表現だと考える。藤原与一(1992)によると謝礼のあいさつとしての「ありがとう」は全国的に普遍化しているという。^(注11)また、『現代日本語方言大辞典』によると、近畿地方は「オーキニ」系が強く、その周辺に「アリガトー」系、島根や四国、九州に「ダングン」系がある。^(注12)しかし、「おおきに、ありがとう」と両方を併用する用法も多く、現在のお礼の表現はどちらかという直接認定型を根底としているように見える。

しかし、「かたじけない」のような自己謙讓型の表現形式が消失したわけではない。現在の「すみません」は、相手に対して負荷をかけたことへの謝罪が元となってお礼を表すことが可能である。これは自己謙讓型のお礼のことばと考えてよいだろう。現在でもお礼の表現として基本的には二系統が存在しているのである。

7 まとめ

本稿では、「ありがたい」が対人で連体修飾でなく用いられ始めたとき、お礼のことばとして安定したものとするという考えを元に考察を進めてきた。そして、その初期の例は十七世紀後半に見られることを確認した。江戸時代前期に「ありがたい」がお礼のことばとして、対人関係の中で独立して使用されるようになっていたのである。

また「ありがたい」は、江戸時代を通してゆっくり使用が広がったのではないかと結論づけた。その理由としては、お礼の表現形式には従来からの「かたじけない」という自己謙讓型に、「ありがたい」という直接認定型が加わり二系統が存在することになり、地域や場合によって、表現形式を選択できたためではないかと考えた次第である。

注

- (注1) 柳田征司(1991)『大蔵流狂言に見える、お礼のことば『有難い』と『忝い』について』『室町時代語資料による基本語詞の研究』第四節 武蔵野書院
- (注2) 柳田国男(1956)『毎日の言葉』(創元選書)を底本にした『柳田國男全集(第19巻)』(1990)筑摩書房)所収による。
- (注3) 『狂言六義全注』(1991)北原保雄・小林賢次編 勉誠社による。
- (注4) 『上井覚兼日記』では5例「ありがたい」が使用されているが、すべて「有ることが難しい」の意味ととれる。
- (注5) 使用したテキストは次の通りである。『狂言記の研究』(1983) 北原保雄 大倉

も充分に対応できたからであろう。『虎寛本』にはお礼の「ありがたい」は48例あるが、明らかな対人用法は28例しかないという(表1参照)。一方の「かたじけない」が対人お礼を中心に159例あることと対照的である。また、『日本国語大辞典』(第二版)(2001)の「かたじけない」には『浪花方言(1819頃)』の例が挙げられている。^(注9)

(26) かたじけない 忝也 按に浪花の言葉に目上のものへむかいても忝といふてありがたいと云言葉もんくはつかわず

上方では、「かたじけない」が使用されており、江戸後期でもあまり変化がなかったことになる。江戸では普通に「ありがたい」を使用していたのであろう。江戸後期の作品として『浮世床』を見ると、「ありがたい」のお礼の用法が4例見られる。

(27) せい「そこは不便だから、露の情をかけてつかはさるだ」 徳「ありがたいてへ」

では、何故上方では使用が広まらなかったのか。もともと神仏に対して使用していたお礼のことばであったため、人に対しては気軽に使用しにくかった面もある。が、一つの推測として、対人・対象を評価する「ありがたい」は、直接的すぎて大仰な感が強かったのではないかと考える。

その根拠として、上方では「だんだん」というお礼のことばが江戸時代後期に生じたことや現在も「おおきに」が勢力を持っていることを挙げようと思う。「だんだん」は、『日本国語大辞典(第二版)』によると天明(1781-89)頃から京都の遊里であいさつ言葉として生じたらしい。副詞としての「だんだん」には「かさねがさね」という意味があるところから、もともと「だんだんありがとう」のような副詞的な用法から成立したものと考えられる。また「おおきに」も、「おおにかたじけない」「おおきにありがたい」などの後部を略して成立しているものと思われる。「だんだん」や「おおきに」は一種の婉曲表現と言えようか。婉曲表現のため、「かたじけない」か「ありがたい」かを明言しなくてもよく、気軽に お礼の気持ちを表せたのではないか。

お礼のことばは各地で様々な表現形態がある。しかし、『日本方言大辞典』をみると、根本的には直接認定型と自己謙讓型に分けられそうである。^(注10)

直接認定型：ありがたい系・でかす系・うれしい系・寛大系

自己謙讓型：かたじけない系・かぶん系・かんにん系

「だんだん」や「おおきに」は一部分が独立した形態なので「一部独立型」と呼ぶことにする。一部独立型には次のような語がある。

対人・対象関係のとらえ方の違いではないかという考えを示す。「かたじけない」は相手に負荷をかけたことに対して、自分が恐縮する気持ちを表している。それに対して「ありがたい」は、元々神仏の功德や恩恵に対して恐縮の態度は取りつつも、出来事に対しては「この生じた出来事はめったにないことだ」と直接的な評価を示すものである。

相手に負荷をかけたことに対し「かたじけない」と自分がへりくだる態度は、自分より目下の人に対しては取りにくい場合もあろう。しかし、どんな相手に対しても謝意を表したいこともある。その際目上目下に関係なく、恩恵を受けたことに対し、「めったにないこと」なので「感謝している」と事態を直接的に評価する「ありがたい」を使用する方が便利なのではないかと考えるのである。

(表5)

資料	上演年	語彙 類別	ありがたい			かたじけない				
			感謝	畏敬・感謝		感謝		畏敬		
			人	神仏以外	神仏	人	神仏	神仏以外	神仏	
曾根崎心中	元禄十六	1703			2	1			1	
堀川波鼓	宝永三	1706	1			3				
丹波與作待夜の小屋節	宝永五	1708		2					3	
五十年忌歌念仏	宝永六	1709	3	1	2	3				
冥途の飛脚	正徳元	1711	2	1	1	2			5	
夕霧阿波鳴渡	正徳二	1712	1	1		2			4	
大経師昔暦	正徳五	1715				1				
鐘の権三重帷子	享保二	1717				1			4	
博多小女郎浪枕	享保三	1718	1	4					3	
心中天の網島	享保五	1720	1		1	3				
女殺油地獄	享保六	1721		3	1	4			2	1
心中宵庚申	享保六	1721		2	3	2			3	
合計	小計		9	14	10	22			25	1
			9	24		22			26	

6 二系統のお礼の表現

新しいお礼の表現である「ありがたい」は、従来からの「かたじけない」と同じ意味を持つてはいなかった。「かたじけない」は自己謙譲によるお礼の表現であり、「ありがたい」は対人・対象直接認定によるお礼の表現だったのである（以下それぞれ「自己謙譲型」「直接認定型」と呼ぶ）。独立して使用されるお礼の表現形態が、自己謙譲型の一系統から直接認定型が加わり二系統になったと言えないだろうか。

「ありがたい」がなかなか広まらなかったのは、従来の自己謙譲型のお礼で

これは、危篤状態の夫のため、夫の恋いこがれる相手の反故なりと貰いたいと女がやってきた場面である。周囲の人々の温情に、女が感謝を述べている。西鶴の作品では『男色大鑑』に対人用例が4例見られる（うち1例は連体修飾用法^(注7)）。この作品は貞享四（1687）年初版であるから、同じく十七世紀後半にお礼のことば「ありがたい」が用いられているということになる。

5 「ありがたい」の使用意義

以上から、「ありがたい」は十七世紀後半には対人独立用法が熟していたと結論づけられるのではないだろうか。狂言資料の中では「版本狂言記」の例が早い例であったが、その少し前から対人の独立した「ありがたい」が使用されていたことになる。しかし、その後の「ありがたい」の使用はなかなか増加しない。これは近松世話物浄瑠璃でも同様である（表5）。「ありがたい」の勢力は、江戸時代を通してゆっくりと広まっている様子である。この点に留意しながら、どのような点に「ありがたい」の使用意義があったのかという第二点目の疑問について考察したい。ここで、近松世話物浄瑠璃において、(1)で見たような自分よりも目下の人に対する用法があったことに焦点をあてる。

近松でも「ありがたい」は身分の高い人に対して使用されることが多い。また他に、「ありがたい、かたじけない」と重ねて用いた例が4例ある。「かたじけない」だけではお礼として十分でないという気持ちが生じていたの^(注8)だろうか。ここから、「かたじけない」では十分に表せなくなっていた感謝の気持ちを、敬意の高い「ありがたい」で表すようになったという推論も納得できそうではあるが、敬意が高いのであれば、柳田征司氏の結論の通り、自分より上の身分の人に対しての使用になるはずである。

しかし、(1)だけでなく次の⁽²⁵⁾のような例もある。⁽²⁵⁾は、つまずいた孫右衛門が年若い女性に対してお礼を言った場面である。知らない人に対し丁寧に礼を述べたとは考えられるが、相手が身分的に上だと考えて「ありがたい」を使用したとは思えない。

⁽²⁵⁾（冥途の飛脚）少しもご遠慮なさるゝなと腰膝撫でていたはれば。孫右衛門起き上がり何方やら有難い。お陰で怪我も致さぬ。（孫右衛門 梅川）
このように、「ありがたい」はお礼のことばとして目下の人に対しても使用可能であったことが伺える。とすると、従来の説明だけでは不十分ではないだろうか。

では、なぜ「ありがたい」を使用するようになったのか。ここで私見として、

て後、その人験気をえし時、思ひを晴らさせ申すべし」といへば、この女
なほ涙に沈み、「さても有難し。はやくこの事を聞かせ」と立ち帰りし跡
にて

(表4)

資料	刊年	語彙 類別	ありがたい			かたじけない			
			感謝	畏敬・感謝		感謝		畏敬	
			人	神仏以外	神仏	人	神仏	神仏以外	神仏
宇喜蔵主古今咄揃	延宝六年	1678				1	1	2	
当世軽口咄揃	延宝七年	1679				2			
軽口大わらひ	延宝八年	1680	(1)			2			
杉楊子	延宝八年	1680	2	1	2	3		3	8
当世手打笑	延宝九年	1681				1		1	
当世口まね笑	延宝九年	1681				4		1	
正直咄大鑑	貞享四年	1687			9				
新竹斎	貞享四年	1687			1	3	1		
枝珊瑚珠	元禄三	1690			2				
軽口露がはなし	元禄四	1691		2	1	3			3
遊小僧	元禄七	1694			1	3			
初音草嘶大鑑	元禄十一	1698	1		4	2			
露新軽口はなし	元禄十一	1698		1		1			
露五郎兵衛新はなし	元禄十四	1701							
軽口御前男	元禄十六	1703							1
軽口ひやう金房	元禄頃			1	1	1			2
軽口あられ酒	宝永二	1705				1			1
露休置土産	宝永四	1707			9	1		1	
軽口星鉄炮	正徳四	1714				1			
軽口福蔵主	正徳六	1716	1		1	1			
軽口出宝台	享保四	1719				4			1
軽口はなしとり	享保十二	1727			1			1	1
軽口機嫌囊	享保十三	1728			2	2		1	
座狂はなし	享保十五	1730	1		1				
軽口蓬萊山	享保十八	1733			2	1			
水打花	享保頃			1	1	7			
軽口もらい糸くぼ	享保頃					1		1	
合 計	小 計		6(1)	1 6	3 8	4 5	2	1 1	1 7
			6(1)	5 4		4 7		2 8	

() は連体修飾の用例

4 狂言資料以外での諸相

では、狂言資料以外でも同様の諸相は見られるだろうか。次に、十七世紀後半から十八世紀前半にかけての「ありがたい」の用例を「断本」を中心にすることにした。「断本大系」の中で、対人の例として最も早いものが⁽²²⁾である。これ以前の「ありがたい」の用例では神仏への畏敬を主としたものや、連体修飾用法のものしか見られない。ただし、⁽²²⁾でも「ありがたき仕合」という連体修飾用法であるので、参考程度にとどめよう。

⁽²²⁾ (首呂里狂哥咄・一) (寛文十二 1672 年刊) そろりまかり出、御秘蔵の松の枯るとハ、かぎりもなきめでたき御事、御小性衆お御祝儀に一首仕らんと、さらへと書て照覧に入奉りける。

御ひそうのとこよの松八かれにけりをのがよ八ひを君にゆづりて
秀吉公御感ありて、能こそ祝ふたり、そろりに金とらせよとありければ、
そろりうけたまハリ、ありがたき仕合、しかし只今御金を拝領仕るよりハ、
しかし、対人の用法が「断本狂言記」より早く見られることは注目に値する。
では、対人でかつ連体修飾でない「ありがたい」の用例はいつごろ出てくるか
というと、延宝八 1680 年刊の『杉楊子』に次のような例が見られる。

⁽²³⁾ (杉楊子) 名にめてゝおがミ申そ南無薬師われ野夫医者と人に見するな
と心中に祈念をし、安居院にぞあゆませゆく。(中略) 病家にこそは成に
ける。手綱取手の袖口も、わたうち出て見くるしきに、亭主はおもてへ走
出、はるへ是まで有難しと、馬より下にいたきおろすに

これは亭主が医者に向かって「遠いところ、ここまでありがたい」と言っている。対人の独立したお礼のことばとみてよいだろう。

以上から、対人でかつ連体修飾でない例は十七世紀後半に出てくると言えそうだ。とはいえ、お礼のことばとしては「かたじけない」の方が一般的であったことは間違いない。十七世紀後半から十八世紀前半の「断本」の作品をみると、お礼のことば「ありがたい」の例は少ない。「対人以外」の「神仏」(天皇・天道を含む)に対する畏敬や感謝、「神仏以外」での「有難き薬、示し」といった用例ではかなり見られるが、お礼の用法は少ないのである(表4)。

さて、対人の「ありがたい」の成立時期は十七世紀後半ではないかと考えたわけであるが、「断本」以外でも同様の諸相が見られるであろうか。井原西鶴の浮世草子では次のような例がある。

⁽²⁴⁾ (男色大鑑・6) 情をしる人々、しばらく女の心ざしを感じて、太夫には知らせずして、肌になれたる定紋の緋無垢を遣はし、「これを見せ給ひ

(注5)
 れている。「版本狂言記」での諸相は、柳田征司氏が数値的な面で既に調査されている(表2)。しかし、ここで(15)の考えを元にして、「ありがたい」の対人での使用という点に焦点を当てると(表3)のように修正される。対人で独立した用法は(19)から(21)のように見られる。いずれも大名や奏者という身分的に上位の人に対して述べていることが分かる。

(19) (続・秀句大名) シ 此上下小袖は。着ふるしたれ共。是もそちにやるぞ 遠 是は又。重々拝領いたし。有がたふござる(遠国方のもの大名)

(20) (拾遺・松ゆづり葉) ソウ 三はいつゝのふて其後何にてもめてたい和歌をあけてたちませい。御暇くださるゝそ 二人 はあ是はありがたふ御さります(百姓 奏者)

(21) (拾遺・佐渡狐) ソウ 身ともがしやくをするそ 二人 これは慮外でござります。これは有かたい仕合でござります(百姓 奏者)

対人の「ありがたい」は『続狂言記』で最初に使用されており、『拾遺』では用例数が増えている。とはいえ、(21)に見られるように、単独ではなく連体修飾用法で用いられる場合も含んでいる。『拾遺』の対人用法8例のうち2例は「ありがたき仕合」という連体修飾の表現である。

(表2)

	用法	資料			
		正篇	外五十	続	拾遺
有難い	お礼のことばの可能性のある例	0	0	8	9
	お礼のことばでない例	5	0	5	16
忝い	お礼のことばの可能性のある例	21	26	42	43
	お礼のことばでない例	2	4	3	5

(表3)

	用法	資料			
		正篇	外五十	続	拾遺
有難い	対人のお礼のことば	0	0	1	8
	対人以外(神仏関連)	5	0	12	17

問い返しの例1例を含む

ここで、『正篇』や『外五十番』に対人の用例が見られないことは、『虎明本』や『天理本』と共通する。このことから、江戸時代前期十七世紀の最後の頃に、対人のお礼のことば「ありがたい」が熟してきたのではないかと推察できるのではないだろうか。

疑わしい例は、虎明本狂言の対人の例と同じく、「心ざし」の語を伴っている場合が殆どである。(p.140)

と指摘され、次のような例を挙げている。

(16) このほど櫛あかの水を持ち来りたまふ心ざし、返返有がたう候 (車屋本謡曲・日本古典全書、美輪)

また、「心ざし」の語を伴わない例としては次のような例が挙げられている。

(17) 此山里までの御幸、返すへも有がたうこそ候へ(車屋本謡曲大原御幸) これらはいずれも連体修飾用法での「ありがたい心ざし」「ありがたい御幸」が元になっているように感じられる。この段階では(15)に述べたような独立したお礼のことばとは言い難いのではないだろうか。意味の面においても、室町時代の「ありがたい」は「有ることが難しい」という原義をまだ強く持っていたようである。天正年間(1573-1592)の「ありがたい」に関して東京大学史料編纂所データベース「大日本古記録」を検索すると『上井覚兼日記』に次のような例が見られた。

(18) (天正2年閏11月9日)一向従此方者無御存知事候条、兎角御返事有かたき由候、此分寄合中へ申候、

前後の文脈から判断すると「(殿は) 今度の件については知らなかったことなので、何ともいいようがなく、返事をする^(注4)ことは難しい」の意かと思われる。このように、室町時代の「ありがたい」は、用法の面でも意味の面でも、お礼のことばとしてはまだ熟していなかったと言えそうである。

以上から、お礼のことば「ありがたい」は、江戸時代初期の段階ではまだ定着していなかったものと思われるのである。

3 「版本狂言記」での「ありがたい」

お礼のことば「ありがたい」は江戸時代初期以降、しかしおそらくは江戸時代前期頃に成立したように見える。しかし、江戸前期の狂言資料には確たる例は見られなかった。これは狂言台本が大蔵流や和泉流という家元流派であるため、正本としての伝統性が新しい言語現象を阻んだのであろうか。そこで次に、家元流派ではない狂言資料として「版本狂言記」を見てみることにする。

「版本狂言記」は「版本」として出版された狂言本である。「版本狂言記」は四種の版本からなるが、それぞれの刊記は異なる(各篇は『正篇』、『外五十番』、『続』、『拾遺』と略称する)。「正篇」は万治三(1660)年、『外五十番』は元禄十三(1700)年、『続』は元禄十三(1700)年、『拾遺』は享保十五(1730)年に出版さ

(表 1) (下線は筆者による)

	資料 用法	虎明本 (294番)	虎清本 (8番)	虎寛本 (165番)	山本東本 (110番)
有難い	お礼のことばの可能性 がある例	5	1	<u>48</u>	<u>56</u>
	お礼のことばでな い例	<u>50</u>	3	31	44
忝い	お礼のことばの可能性 がある例	<u>148</u>	<u>5</u>	<u>159</u>	<u>155</u>
	お礼のことばでな い例	24	1	8	5

以上のような例を見ると、眼前に生じた現象に対して「めったにない」と評価する思いと神仏関連への感謝の思いとが分離不能な状態で「ありがたい」と言っているのではないかと改めて思われる。大蔵流以外の狂言資料として和泉流『狂言六義』(寛永年中 1624-1643 書写、以下『天理本』^(注3)と呼ぶ)を見ても、次のような神仏関連の例しかない。

(12) (天理・筒竹筒) 扱々、是までの御らんりん、有難ふ存ると云て

(13) (天理・夷大黒) 扱々、有難き、御事にて候

(14) (天理・福の神) さてへ、是までの、御来臨、有難ひ事で御ざるが、そこで、神仏にまつわる事象・経典・志(特に神仏関連のもの)などの要素が絡んでくるのを避けるために、お礼のことばとしての「ありがたい」の成立を次のように考えることにしたい。

(15) 「ありがたい」は対人関係において連体修飾用法でなく使用され始めたときに、お礼のことばとして安定したものとする。

連体修飾用法とは、「ありがたき志」などの用法をさす。連体修飾用法でないというのは、「ありがたい」が独立して使用され始めたことを意味する。このように限定することで、「ありがたい」は江戸初期頃はお礼のことばとして定着していなかったと言えるのではないだろうか。

しかし、柳田征司氏が「ありがたい」成立時期をめぐって慎重な立場を取られるのはもう一つ理由がある。それは、室町時代に既にお礼のことば「ありがたい」の疑わしい例が見られるという点である。そこで、室町時代の「ありがたい」について考察することにしよう。柳田征司氏は、室町時代の「ありがたい」に関して、

- (6) Catajiquenai お礼の言葉、あるいは、ある事に対して謝意を表する言葉。(下線は著者による)

江戸時代初期の「ありがたい」は神仏に対する畏敬と感謝が混在した感情を表しており、人から人へのお礼のことばとしては認識されてなかったのではないかという感がするのだ。また、「かたじけない」は対人お礼のことばとして広く用いられる反面、十七世紀後半や十八世紀前半において、神仏関連へのお礼のことばとしての用法は少ない(後の表4、表5参照)。つまり、「ありがたい」と「かたじけない」は江戸時代初期、別々の意味と用法を持っていたものと考えられないだろうか。

2 江戸時代初期頃の「ありがたい」

柳田征司氏の調査によると、『虎明本』にはお礼の可能性のある「ありがたい」が5例見られるという(表1)。しかし、この5例は疑わしいとする見解も併せて述べられている。確かに『日葡辞書』の記述を元にすると、お礼のことばとしては時期が早いような気がする。そこで用例を再検討してみよう。(7)から(11)がその用例である。(7)(8)の例は神仏に対する畏敬と感謝の両方であると取れそうであるし、(9)はお経の「ありがたさ」とも取れそうである。(10)(11)は「お志、有難ふござる」となっているので、対人のお礼のことばとして使用されてはいないようである。

- (7) (虎明・夷大黒) (えびす) よくへしんがうせよ、たのしうなさうずるぞ (おとこ) 近比ありがたう候
- (8) (虎明・鉢叩) (瓢の神) われふくべの神ともいはれし故に、はちたゞきどもしんして、あゆみをはこぶ心ざしやさしければ、すがたをおがませんため、是まで出たるぞとよ (鉢叩二) 近比有難き御事にて候、先是に御こしをめされ候へ
- (9) (虎明・泣尼) (住持) 衆生皆具成仏道 (施主) 近比ありがたふこそ候へ、まつ御酒をまいつて下されひ
- (10) (虎明・地蔵舞) (亭主) よさむなほどに、さけを一つまいれと云事じや (出家) お心ざしは有がたふ御ざれ共、おんじゆかいをたもつて御ざる程に、なりませぬ
- (11) (虎明・呂連) (夫) ゆるりとござれ、せんそくをも、おひぢをも申付けてござる (出家) お心ざし有難ふござる、惣じて出家などゝ申者は、人のあはれみばかりでよをおくるもので御ざる

であるから、年上の方が年下の人に対して「ありがたい」を用いてお礼を述べていることになる。このような例から、目上目下の関係とは別の角度からの見解も示すことができるのではないかと考える。そこで本稿の第二点目の目的として、どのような点で「ありがたい」が有意義だったのか、お礼のことは「ありがたい」の成立時期と併せて私見を述べることを試みたい。

1 「かたじけない」と「ありがたい」

『虎明本』の頃、「かたじけない」にも「ありがたい」にもお礼のことは用法とそうでない用法の二通りがあったようである。「お礼のことは」の可能性がある例として、柳田征司氏は(2)の例を挙げている。

(2) (虎明・麻生) くだつたらはくわつとふちをせうぞ 主 下人 それは
かたじけなふござる

一方、「お礼のことは」ではない例としては(3)(4)の例を挙げている。

(3) (虎明・牛馬) 忝も天神の御詠歌に、牛の子にふまるな庭のかたつふり

(4) (虎明・鏡男) 切有がたいだから物じやと申ても

(3)は「恐れ多くも」という畏敬の表現であろう。また(4)は「めったにない」という意味で用いられていると考えられる。もともと「ありがたい」は「有ることが難しい」、つまり「めったにない」という意味で用いられていた。「ありがたい」に関する記述として、次のような柳田国男の指摘がある。^(注2)

最初は言葉通りあり得ないもの、あるのがふしぎなものという意味で人間わざを越えた神の御徳・御力を讃えてそう言っていたのが、いつからまた人と人との間のお礼のことはなつたものか、少なくとも後の方は中世以前の記録には無いようです。(p.427)

ここで注目すべき点は、人から人へのお礼のことはとして使用されるようになったのは比較的新しい現象であるという指摘である。

では、江戸時代初期の諸相は如何ようなものであったのか。『日葡辞書』(1603年刊)をみると、「ありがたい」の意味としては(5)のような記述が見られる。また用法としては「ありがたき志」のような連体修飾が主となっていた感がする。一方の「かたじけない」が既に(6)のように記述され、「謝意のことは」と明記されていることを鑑みれば、「ありがたい」は「お礼のことは」としては熟していなかったのではないかとと思われる。

(5) Arigatai 神聖な (もの), または, 感謝や尊敬に値するような (もの).
また, 珍しくて手に入れにくい (もの)

お礼のことば「ありがたい」について

荻野 千砂子

0 はじめに

お礼のことば「ありがたい」については、柳田征司^(注1) (1991) に、江戸時代書写の狂言資料を中心とした詳細な研究がある。柳田征司氏によると、大蔵流『虎明本』(寛永十九 1642 年書写) や『虎清本』(正保三 1646 年書写) のころは、お礼のことばとして「かたじけない」が広く用いられていたが、大蔵流『虎寛本』(寛政四 1792 年書写) や大蔵流『山本東本』(1836-1902) のころには「ありがたい」も多く用いられているという。また、この両語をめぐっては、次のような三点が主に述べられているようである。

- (一) お礼の可能性のある「忝ない」はどの台本資料でもよく用いられる。一方お礼の可能性のある「有難い」は『虎明本』に少なく『虎寛本』『山本東』に多い。
- (二) 「有難い」も「忝ない」もともに目下に対して用いられた例がない。
- (三) 或る人物関係においては「有難い」と「忝ない」とが併用され、別の人物関係においては「忝ない」のみが用いられており、前の人物関係は上下の開きが大きく、後の人物関係は上下の開きが小さい。つまり、「有難い」の方が「忝ない」より敬意度が高い。

しかし、いつ頃お礼のことば「ありがたい」が成立したかという問題に関しては慎重に論を進められている。その理由として一つは、狂言資料を中心とした考察であるため、資料性の限界を鑑みれば、江戸時代に成立したと断言しがたいということのようである。

そこで、まず本稿の第一点目の目的として、狂言以外の資料を主とした場合、「ありがたい」の成立時期を探ることが可能かどうか試みたいと思う。また(二)(三)に関して、再検討を加えたい。なぜなら、江戸前期上方資料の中には次のような例が見られるからである。

- (1) (近松世話物浄瑠璃・五十年忌歌念仏) 氣遣致せし折からなり傍輩誼みとて御知せ有難し (清十郎父 勘十郎)

これは清十郎の父が清十郎の朋輩勘十郎に言った言葉である。父親の方が年上